

朝野僉載考

一、まえがき

朝野僉載は、遊仙窟の著者として知られる盛唐の詩人張鷟の撰になる雑録ふうの説話集である。

それは、新唐書卷五八藝文志雜傳記類に「張鷟朝野僉載二十卷」と記され、宋史卷二〇三藝文志傳記類にも同様に記録されている。しかしこの二十卷本は現在傳わらず、現在傳わる刊本はすべて叢書の中に含まれており、元・明以後の編集に成るものと思われるものばかりである。四庫提要卷一四〇子部小説家類には、僉載を解説して「朝野僉載六卷」とあり、また「晁公武讀書志、また其れ三十五門に分つと謂ふ。而るに今本はすなわち逐條聯綴して、門目を分たず」と記しているとおり、知見する限りでは、陳眉公祕笈本及び靜嘉堂文庫所藏鈔本朝野僉載以外は門目を分っていない。

さらに僉載の性格についても、その認識は一定していない。古いところから言うなら、新唐書藝文志では、それは雜傳記類の中に入れておられる。そして佛教説話集であるところの冥報記（唐臨撰）だの、もろもろの家傳・外傳・別傳・行狀のような個人の比較的信頼のおける範圍の傳記のあとにくつついて、唐朝の歴史人物の逸話集であると

内山知也

ころの國朝傳記（劉餗撰）・尚書故實（李緯撰）・投荒雜錄（房千里撰）などと共に並べられている。そういう所を見ると、どうもこの宋代の目錄學者は僉載を、やや信憑性に缺けるか、二三流の人物に關する逸話であるか、あるいは事件が瑣末すぎるかしてはいるが、なお據るべき史料であると考えていたようである。また宋史の編集者にとつては一層信賴の傾向は深められていったと言えよう。

ところが、四庫提要は「其の書はみな唐代の故事を紀す。しかれども諧噓荒怪に於けるまで、纖悉臚載せ、いまだ纖碎に失するを免れず。故に洪邁の容齋隨筆は、その記事の瑣屑摘裂にして、かつ喋語多きを譏る。而れども耳目の接する所、據るべき者多し。故に司馬光通鑑を作るに、また之を引用す。兼收博採、固よりいまだ嘗て見聞に裨するなからざるなり。」と記している。すなわち、提要の編者の頃になると、僉載は小説の分類に入れられ、南宋初期の隨筆家の酷しい見解の上に立ち、その史料の價值については、小説はしばしば筆者自身の見聞を記録するゆえに、少しはその存在を認めるといふことになつたのである。

このような書誌學者の見解の違いは別にして、朝野僉載は張鷟を知するための最良の資料であることは言うまでもない。竹田復先生は「遊

仙窟の性格」(日本大學創立七十年紀念論文集所收)において、張鸞の性格、詞文の才能、處世態度、及び遊仙窟の背景資料として尙載を用いられた。そしてとかく張鸞が、舊唐書傳の「褊躁にして土行を持せず、尤だ端士の惡む所となる」という記事や、新唐書傳の「隙下儼蕩にして檢なく、正人の遇する所となること罕なり」といった記事とを、遊仙窟のあの遊蕩な氣分に直線的に結びつけて、奔放無頼な人物であつたと考えられがちなのを否定され、彼こそ正義感に満ち、自然の理法に隨い、人間の自主性を堅持し、人間の生活を直視する人であるとして、張鸞の積極面を新しく發掘されている。

小論は、朝野尙載が、そういう張鸞のいならない心情の記録であり、彼の耳目を通じた當時の社會の記録であるという見地に立つて、その説話集としての性格を考察し、あわせて小説史上の位置と、張鸞の意圖について論及する。

二、朝野尙載の諸本

朝野尙載の現行のテキストには次のようなものがある。

- (1) 太平廣記(宋・李昉等奉勅撰)鉛印人民文學社本には朝野尙載約三九三則を收める。
- (2) 太平御覽(宋・李昉等奉勅撰)景印中華書局本には二則を引く。
- (3) 說郛(元・陶宗儀編)鉛印新興書局本、卷二の朝野尙載の項には三四則を收める。
- (4) 重校說郛(元・陶宗儀、明・陶珽編)明末刊本、弓第四八の朝野尙載の項には九三則を收める。
- (5) 續百川學海(明・吳永編)明刊本、乙集第六冊の朝野尙載の項には八八則を收める。

- (6) 亦政堂鑄陳眉公普祕笈(明・陳繼儒編)明刊本。第一冊より第三冊まで計三冊六卷。卷一は黃承玄・沈德先訂で七七則、卷二は岳元聲・郁之驥校で六一則、卷三は李日華・張可大訂で六七則、卷四は岳和聲・沈元嘉訂で四六則、卷五は沈中英・張應世訂で六一則、卷六は顧雲鳳・顧雲鵬校で五八則、以上合計三七〇則を收める。この六卷に分ける形式は四庫提要の内府藏本六卷と同一で、知見したた一つの刊本である。

- (7) 歷代小史(明・李栻編(明の萬曆十二年刊本。卷一五の朝野尙載の項には二三則を收める。

- (8) 五朝小説(明・桃源居士編)明刊本。第二冊の朝野尙載の項に八八則を收める。このテキストは續百川學海本朝野尙載と全く同一形式内容である。

- (9) 古今說海(明・陸楨編)鉛印本、雜記家の朝野尙載の項に二二則を收める。

- (10) 畿輔叢書(清・王灝編)清刊本、初編子部の朝野尙載一卷に一〇六則を收める。

- (11) 唐代叢書(清・王文誥・邵希曾編)清刊本、第二冊の朝野尙載の項に一〇九則を收める。

- (12) 說庫(民國・王文濡撰)新興書局景印本に朝野尙載一一一則を收める。

- (13) 類說(宋・曾慥撰)明刊景印本、卷四〇の朝野尙載の項に六七則を收める。ただし、節錄と見られる。

- (14) 鈔本朝野尙載(年代不詳、陸心源藏書印あり)乾坤二冊、十卷、靜嘉堂文庫藏本。卷一は「王子貞」他五四則、卷二は「路潛」他五五則、卷三は「陳懷卿」他二四則、卷四は「袁守一」他四七則、卷

五は「歐陽通」他三五則、卷六は「辛亶」他三〇則、卷七は「李宜得」他三三則、卷八は「惠範」他三三則、卷九は「鄭愷」他二二則、卷一〇は「雜說」四八則、合計三八一則を收める。

以上のように朝野僉載は類書か叢書の中に收められ、元來の二十卷本の姿を示すものはない。また各本の所收話數はめいめいに違つており、校勘を要する。

本論においては右の諸本のうち、太平廣記所收のものを使用する。

三、歴史資料としての朝野僉載

朝野僉載が雜傳記類から小説類に組かえられたということは、提要の編者が、僉載を歴史資料としてよりも、むしろ小説（提要の編者の定義によれば、雜事を叙述し、異聞を記録し、瑣語を綴輯したもの）であると見たからである。彼等によれば、小説は本來誣謾で眞實を失い、妖妄にして聽を熒わすものであり、冗雜で猥鄙荒誕であり、いたづらに耳目を亂すものであつて、眞實とは離れがちなものである、つまり小説はセンセーショナルな記録である、と規定されるであろう。史學者は史料として、そういうセンセーショナルな記録に迷わされることを戒めなければならない、という建前がそこにはっきり示されている。ところが、元來人間のエピソードによつて歴史を描寫しようとする中國古代史學者の一般的風潮は、當然歴史人物の周邊に起つたセンセーショナルな事件に注目せざるをえない。ことに動亂の時代に關する記録は、公式機關においても手薄であり、まして政府の記録が失なわれた時には、僉載のような私的記録によつて事實を探らざるをえなくなる。僉載が司馬光の資治通鑑の史料となりえたのはこのような理由からである。

司馬光はその通鑑考異において、ほぼ二十個所にわたつて朝野僉載を引き、他の資料と對照して、採否の理由を述べている。あるいは考異に記録せずに、黙つて採用している場合もありうると思われるが、今は考異に記すところのみを取り上げて、司馬光が他の史料と比較したさい、僉載をどのように見たかについて調査を試みると、まず、司馬光が僉載の記事を否定した場合はほぼ十二例で、その理由として、張鷟の描寫表現が誇大であるからというのが二例、張鷟の恣意や含む所があつての記事であるというのが二例、事實に反しているというのが二例、實錄（他資料）に従うとするものが二例、他四例は理由を付けない。一方、司馬光が僉載の記事を承認した場合はほぼ八例であつて、僉載の記録が正確であるからとする場合が三例、他説を棄てて全面的に従うという場合が一例、參考として採用するという場合が三例、他の一例は理由を付けない。

このように、少くとも宋代史學者にとつて朝野僉載はなお興味深く重要な史料であつたのである。もちろん正式な史料として彼がしばしば引くところの舊傳・御史臺記・統記・實錄は、それ以上に重要な文獻であつたらう。しかし、それらの文獻も僉載によつて退けられている場合があるところをみると、その感を深くさせられる。

しかし、朝野僉載の價値は史料としてのそれだけであつたのではなく、提要の編者の言うような、その猥雜さ、饒舌さの中にはっきりと姿を現わしているところの、説話集・逸話集としての面白さの方にあり、それによつて多くの讀者をひきつけてきたであらうと思われる。

四、説話集としての朝野僉載

朝野僉載とは、本來どんな性格を持った集なのであらうか。實に雜

多な記録や説話を、いま便宜上太平廣記の分類によって作品数を示しながら、その分類題目によって説話の内容を大まかに見ると、次の四種類に大別できる。もちろん各々の説話の主題については、廣記の編者の分類意識から問題にしてかからなければならぬので、あくまでも便宜上の区分である。

(1) 佛教説話(計八九則)

異僧(四) 報應(二二) 徵應(二三) 定數(二五) 感應・譏應(二五)

(2) 人物を中心とした説話(志人小説)(計二〇四則)

吝嗇(六) 氣義(一) 知人(三) 精察(八) 幼敏(二) 器量(三) 氏族(一) 銓選(四) 將帥(一) 驍勇(六) 豪俠(一) 博物(一) 文章(二) 才名(三) 樂(二) 書(一) 畫(一) 卜筮(四) 醫・暴疾(一四) 伎巧(九) 器玩(四) 奢侈(八) 詭詐(六) 諂佞(九) 謬誤(三) 治生(一〇) 褊急(三) 談諧(四) 嘲諷(一五) 嗤鄙(二八) 無賴(一一) 輕薄(一) 酷暴(二〇) 婦人(八) 僮僕奴婢(一)

(3) 道教説話(志怪小説)(計六〇則)

夢(八) 巫厭(六) 幻術(二〇) 妖妄(一一) 神(五) 鬼(四) 妖怪(五) 人妖(一) 精怪(一) 再生(三) 塚墓(四) 銘記(二) 博物説話(計四〇則)

山(一) 石(三) 寶(一) 草木(三) 龍(一) 虎(三) 畜獸(八) 狐(三) 蛇(七) 禽(一) 水族(三) 昆虫(二) 蠻夷(四) [雜録(三)]

この第一群は、冤魂志・集靈記(顔之推撰)、宣驗記(劉義慶撰)、冥祥記(王琰撰)、旌異記(侯白撰)など、六朝・隋以來の佛教説話

集の流れを汲む説話としての一面を持っている。また第二群は、世説新語(劉義慶撰)、笑林(邯鄲淳撰)、啓顔録(侯白撰)の流れを受け、人間の行爲・言語そのものを話題とするもので、六朝志人小説の一面と、歴史的記録を意圖する一面を持つ、いわば人物批評ふうの説話である。次の第三群は、搜神記(干寶撰)、幽明録(劉義慶撰)など、民間信仰や傳説・傳承を中心とした奇怪なできごとを話題とするもので、六朝志怪小説の流れに沿うものである。第四群は、博物志(張華撰)のような、中國およびその周辺の諸國の自然・風俗・動植物などに關する奇聞の收録を意圖したもので、一部は道教説話ふうの動物説話の類に入り、他は百科事典ふうの啓蒙記事に屬する。當時においては珍貴であつたらうそれら異國絕域の記事も、現在からすれば荒唐な記録の断片に色あせてしまっている。

以上の四群を數量の點から言うと、第二群の志人小説(人物批評ふうの説話)に張鷟の意欲は多く注がれていたと言えよう。彼において、佛教の靈顯も道教の靈異もたしかに興味深いことがらだったが、それ以上に、彼の生きた時代のできごとで直接聞見した、則天武后や韋后の周邊に狂奔する醜怪な人間像、それに對する社會の反應、そうした歴史的事件の中に生きる人間の言行に心ひかれていた。そう見ると、人間の言行を通して歴史の流れを把握しようとした中國古代の歴史家の眼に張鷟の眼もまた類似していたと言ふことができよう。

(a) 人物を中心とした説話と張鷟

張鷟の數多い説話の記録の中に自分の評語・感想を書き残している幾篇がある。いま彼が評語を記した人物についてのみ概観しよう。張鷟は、則天武后の寵愛をうけ、暴虐な刑罰をもって人民に臨んだ

官僚をひどく嫌った。例えば、巨大な枷を作って人民を恐怖させ、最後にはあべこべに自らその枷にかけられるはめになった洛州司馬弓嗣業・洛陽令張嗣明の末路を、彼は「百姓これを快とせり」（廣記二二一・弓嗣業）と言ひ、また數々の酷刑の例をあげたあと、その殘忍暴虐な所行の結果、嶺南に流され、仇家によって殺された周興について「傳に曰く、多く無禮を行なへば、必ず自らに及ぶとは信なるかな」（廣記二二一・周興）という。また張楚金の失脚についても「議する者曰く、法を爲りて自ら斃る。いはゆる交報なり」（廣記二二一・張楚金）と述べて、彼等の滅亡を自ら爲せる罪業の報いであると快哉を唱えている。

廣記一六九に「張鷟」と題して收められている僉載の文章は、鷟が客の質問に答えるという形式で婁師德（六三〇—九九）・狄仁傑（六〇七—七〇〇）・李昭德（？—六九七）・來俊臣（？—六九七）・武三思（？—七〇七）・魏元忠（？—七〇七）・李嶠（六四四—七二三）・徐有功（六三五—七〇二）・趙履溫（？—七一〇）・鄭愔（？—七一〇）の十名について人物批評を行なった興味深いものである。それを劉餗の隋唐嘉話、および舊唐書傳の記事を比較すると、張鷟の個性が一層明らかになるう。

(1) 婁師德について張鷟は「納言は直にして温、寬にして栗。外愚にして内敏、表晦にして裏明。萬頃の波、渾として濁らず。百鍊の質、磨して磷^{リン}がらず。淑人君子、近代の名公なる者と謂ふべし。」と記し、嘉話は、弟が代州刺史に拜せられ出發しようとするとき、弟を戒めて、顔に唾をかけられようともそれを拭ってはならぬと保身のための忍耐を説く説話が收められている。舊唐書傳には「師德頗る學涉あり。器量寬厚にして、喜怒色に形はさず。自ら専ら邊任を綜ぶ」と

評している。後の二者に比較すると、鷟はいかにも美文ではあるが、師德の外見と内面の相違にふれ、内部の正直さと注意深さが、外面の茫漠として寛容な姿勢を支えていると見てとっている點に把握の深みが感ぜられる。

(2) 狄仁傑について張鷟は「ほぼ經史を覽、いささか文筆に閑ふ。箴規切諫には、古人の風あり。淫祠を剪伐するに、烈士の操あり。心神耿直、涅して淄まざる。膽氣堅剛、明にしてよく斷ず。晩達にして錢癖あり。」とその切諫と明斷の功績をたたえ、しかし銅臭のあつたことも付け加えることを忘れない。嘉話には、仁傑が江南の安撫使となつたとき、各地の淫祠を破壊したことを収録している。舊唐書傳は、「史臣曰く、唐祚の中興するや、諍は狄公一人によりて以て蔽はる。或ひと曰く、之を許すこと太甚しと。答へて曰く、革命の時に當り、朋邪甚だ衆し。誠を推し力を竭し、身を致し家を忘るる者に非ずば、孰かよく此に與らんや。仁傑流死すら避けず、骨鯁彰はるるあり。好んで無辜を殺すに逢ふと雖も、よく終に大義を畏れ、竟に天下を存せしむ。あに然らざらんや。」と記し、その諫諍の功を強調している。僉載は嘉話と傳の兩者を含みながら、古人烈士の風操を持つという肯定面と、銅臭があつたという否定面の兩面から廣く觀察していることがわかる。

(3) 李昭德について僉載は、「李昭德は志大なれども器小なり。氣高けれど智薄し。權に假りて物を制し、險を拒して人を凌ぐ。剛復餘りあれども恭寬足らず。身を謀るの道に非ざるなり」と言ひ、それゆえに「俄かに法に伏」した、と批評する。嘉話には、納言婁師德が肥って歩くのが遅いのに待ちくたびれいら立った内侍昭德が「この人殺しの田舎者にはやり切れん」と宮中で怒りだしたのを、師德が靜

かに笑いながら「私は田舎者ぢやないが、そうすると誰がそうなんだらう」と言った、という説話を載せている。この説話は兪載の「氣高けれど智薄し。權に假りて物を制し……」という記事を裏書きしているようにみえる。一方舊唐書傳は、昭徳が來俊臣と同日に誅されることになったとき「この日大いに雨ふり、士庶昭徳を痛み俊臣を慶せざるなし。相ひ謂ひて曰く、今日天雨ふらず、一悲一喜と謂ふべし。」と、人民の同情を受けたことを記し、さらに神龍（七〇五）年間の制書の文を載せて、その剛直な性格を贊えて、缺點には少しも觸れていない。

(4) 魏元忠について三者の批評は大差ないように見える。兪載は「元忠は文武雙びに闕け、名實兩つながら空し。外には貞剛を示し、内には趨附を懐く。張食其の黨を面折し、勇は熊羆のごときも、武士開のともがらに諂事し、怯なること篤犬と同じ。首鼠の土にして、進退兩端あり。虺蜥の夫にして、かつて一志もなし。朝を亂り政を敗るは、この人にあらざるなし。三思の徒に付き、五王の族を斥けり。吾を以て熟察すれば、終にその死を得ざらん。」と豫言する。嘉話には、元忠の朝廷で立つ位置がいつも同じ場所、寸尺も違わなかつたという話と、出獄を許された時あまりの嬉しさに赦免を傳えに來た小吏の名を新しく自分の名にしたという話を収めている。いかにも几帳面で小心な風貌を傳えるエピソードである。舊唐書傳は「史官曰く、……況や元忠・安石・巨源・至忠・彦昭等は、行ひ純一にあらず、識存亡に昧し。利に徇ひ榮を貪ること、始めありて卒りなし。その死を得ざりしは宜なるかな。」と記して、兪載に類似した評を下している。

(5) 李嶠について張鷟の批評は酷しい。すなわち「李公に三戻あり。性榮遷を好み、人の昇進を憎む。性文章を好み、人の才筆を憎む。

性貪濁を好み、人の賂を受くるを憎む。また古者に女君あり、性肥鮮を嗜みて、人の肉を食ふを禁じ、性綺羅を愛して、人の衣錦を斷ち、性淫縱を好み、人の聲色を畜ふるを憎みしが如きは、これまた李公の徒なり。」と記して、暗に則天武后を共に非難している。嘉話は嶠についての逸話を載せず、舊唐書傳は「史臣曰く、……李の知には守常の道あれども、應變の機・規諫の深なし。」と褒貶あいなかばしている。

(6) 徐有功に關して張鷟の評價は極めて高い。それは有功が司法の職に在つて敢然として來俊臣等の酷吏と對立し、法を守るために努力したためである。「有功は耿直の士なり。明にして膽あり、剛にしてよく斷ず。陵夷の運に處り、儉媚して以て容を取らず。版蕩の朝に居て、辭を遜して以て苟免することをせず。來俊臣羅織すれば、有功これを出し、袁智弘鍛鍊すれば、有功これを寬にす。虎尾を躡んで驚かず、龍鱗に觸れて懼れず、鳴梟の内に鳳時し、直すに全身を以てす。豺狼の間に豹變し、忠以て害を遠ざく。もし清平の代に値はば、則ち張釋之・于定國もあに同年にして語られんや。」と張鷟は書いて、これまでにない贊辭を呈している。嘉話には、何度も武后の怒りにふれてもなお法を守り、人を死刑から救おうと努め、自らも刑場にひかれながら節を屈しなかつた有功のことを記し、その子にまで餘徳が及んださまを述べている。舊唐書傳も兪載と同様に司法官としての徐有功の功績を贊え、「時人これを漢の于・張に比す」と記す。この三つの批評は本質的には殆ど變らないけれども、稱贊の度が最も高いのは兪載である。

その他、趙履温・鄭愔といった權臣については「既に雅量なく、終にこれ凡材なり。此を以て榮を求む。死を得しを幸と爲す。」と罵倒

し、いかに彼がこの種の人物を嫌悪したかを、露骨に現わしている。これら十人に關する張鷟の批評は齒に衣を着せない率直なものであり、所としては感情をむき出しにしている。先秦諸子の散文や、辭賦において試みられた問答様式の人物批評の手法が、ここに流暢な美文によって試みられており、對話と贈答詩によって感情の流れを表達しようとする遊仙窟の手法と、どこか共通な點を持つように感じられる。しかしこの一則は僉載の多くの文章の中では特異なものである。

遊仙窟の著者としていかに輕薄な才子と想像されがちな張鷟は、彼自身を「通人」と目し、輕薄な名門豪族の子弟を戒めている。例えば、來客の郷人が餅子のへりをちぎり捨てようとしたことを李勣が誠めた逸話を録したあとに「浮休子曰く、……今の輕薄の少年は、餅の縁を裂き、瓜を割き瓢を侵し、以て達官の兒郎と爲す。通人の爲さざるところなり」(廣記一七六・李勣)という。

選舉の腐敗と官僚の收賄が國政を亂すという觀念は、彼において強烈なものであった。だから「賄貨縱横にして、賊汚狼藉」(廣記一八五・張文成)な選舉を慨嘆し、また「故に謠に云く、貂足らずして狗尾續き、小人幸多くして君子之を取つと。無道の朝、一に何ぞ連類するや。惜しいかな」(廣記一八六・斜封官)と極言する。

權力が人間を疏外する例を張鷟は極めて多く語っている。そして權力を振う人物に對しては、その暴虐をさらけ出すと共に、その人間的缺陷・弱點を遠慮なく衝いている。例えば、中郎李景遠がひどく人の對面ばかりをつくり、嘘をついたことを記録して、「凡そこの小人、寵を得れば多くのこの状を爲す」(廣記二三八・李景遠)といい、太平公主に媚びてついに破滅した薛稷・李晉らについても「七月三日、家破れ身戮せらる。何ぞ鶻の韋苴に栖みて、大風忽ち起り、巢折れ卵壞

ると異ならん。後の君子、鑒みざるべけんや」(廣記二四〇・薛稷)と記して、彼等をふくろうのように貪婪な人物であり、はかない權力に頼って壞滅したのであると説く。また安樂公主に媚びて權勢を極めた趙履温について、「猖獗せる小人、心忤にして險、行僻にして驕。支を勢族に折み、痔を權門に舐む。上に事ふるに諂らひ、下に接するに傲る。猛なること蹴る虎のごとく、貪ほること餓ゑたる狼のごとし、性人を食ふを愛し、終に人の食ふ所となる。(中略)逆章を誅するの際……刀劍亂下し、男とともに戮せらる。人ごとに一鬮を割き、骨肉ともに盡く」(廣記二四〇・趙履温)と記して、人が人を食う醜惡異常な社會を醸成したこれら權力者の末路を暴くとともに筆誅を加えている。

貪婪な人物もまた張鷟の眼を逃れることはできない。上は滕王嬰・蔣王暉を「みな廉慎すること能はず」(廣記二三四・滕蔣二王)をきめつけ、下は欲張りな饒陽縣令寶知範の子が鷹狩りで大怪我をすると「百姓之を快として、皆曰く、千金の子も一兎の命より易し」(廣記二四三・寶知範)と付け加えて、民衆の立場からこの意地汚い男を嘲笑するのである。新昌縣令夏侯彪之に對しても「その貪鄙不道なること、みな此の類なり」(廣記二三四・夏侯彪之)と記し、王志愔・段崇簡・崔玄信・嚴昇期・張昌儀など地方官僚たちも、鷟によって醜行を暴露されている。

張鷟は君主に媚びて保身する人物を嫌う。例えば來俊臣について、次のような説話を引いて、やがて寵が衰えれば直ちに抹殺されるものであることを述べる。「昔師子王あり。深山より一豺を獲たり。まさにこれを食はんとするに、豺曰く、請ふ王のために二鹿を送り以て自ら贖はんと。獅子王嘉す。周年の後、送るべきものなし。王曰く、

汝衆生を殺すことまたすでに多し。今次いで汝に到る。汝それこれを圖れと。豺默然として應ずるなし。俊臣なんぞ豺に異ならんや。」(廣記二六三・宋之戀)

張鷟がユーモアを愛する人物であったことは、舊唐書傳に「言頗る詼諧」と記されていることで知ることができる。則天武后の朝廷では、前述のような酷吏や貪官な官僚がはびこった反面、身體上の各種の缺陷や能力動作の低劣な部分に着眼して、あだ名をつけて呼ぶことを樂しむという、卑俗なユーモアが流行した。そしてその名人で、特に武后のお氣にいりだったのが張元一であった(廣記二五四・張元一)。ところがその元一にも「逆流蝦蟇」というあだ名があったことを記すのが張鷟である(廣記二五四・吉頊)。そして鷟自身も他人にあだ名をつけていい氣になっている(廣記二五四・朱隋侯、二五五・張鷟)ほどであった。

(b) 佛教説話・道教説話と張鷟

張鷟が數多くの佛教・道教説話を記録したということは、彼もやはり時代の宗教信仰と無縁ではありえなかったことを示すものであり、また、彼自身そこから人間の運命を考え、處生の術を導き出そうとしていたことを意味するであろう。

ところで、初唐期においては、特に佛教説話集らしいものは作られなかったが、天寶年間に秘書監であったところの趙自勳が撰した定命錄(太平廣記には六二篇が採録されている)など、全篇人間の運命はすべて豫め定められたものであって、そこからは逃れ難いものであることを物語っている。その信念は牢固としたものであって、自勳がそういう信仰のもとに、この定命錄を編集したということは疑いようも

ない。それより少し以前に僉載を書いた張鷟にも、やはりそのような觀念があった。例えば、官職の獲得はすべて天命によって前もって定まっているという表白を張鷟自身からも聞くことができる。「官職祿料は天に由るとは蓋し虚りならざるなり」(廣記一四六・魏徵)とか、「まさを知る、官は皆天に由るなり」(廣記一四六・授判冥人官)などという言葉が端的にそれを物語っている。

官職に前定があるばかりでなく、人間の生死もまた「命」に支配されると彼は考える。不幸にして誤って生命を失った者でも、單なる偶然の悪戯ではなく、運命としか考えられないと彼は思う。したがって鷟は「浮休子曰く、此れ逆章の罪、族を疎にせらるるとも何ぞ辜あらん。また冉閔の胡を殺して高き鼻の者の横死し、董卓の閹人を誅して鬚なき者の枉戮せらるるが如し。死生は命なり。」(廣記一四八・韋氏)と書いて、韋氏一族の滅亡を運命と考える。また赦免の報せを携えた使者がつい居眠りしたばかりに、一足違いで處刑されてしまった張嘉福の不幸な死についても、「命は天に非ずや。天は命に非ずや」(廣記一四八・張嘉福)と嘆くのである。

官途は運命に左右されるから、運薄き人たちに對して、彼は同情を惜しまない。例えば、中書令張説と共に科擧に應じながらもついに落第した任之選は、張説に同情され絹一束をもらう。ところが二日とたたぬうちに大患にかかり、絹を藥代にしてようやく病氣も平復する。こんな不運な男に同情して「ただこの度のみに非ず。餘處もまた然り。何ぞ薄命の甚しきや。」(廣記一四六・任之選)という。

このように、運命は時として悲嘆を與えるから、豫知してうまく對處することが願わしい。従って彼は運命の兆候について敏感にならざるを得ない。彼自身、景雲二年(七一)に鴻臚丞になっていたが、

帽子・帶・緣袍がすっかり鼠に嚙られ、栗ほども大きい蜘蛛が寢門に糸をかけた。すると數日のうちに五品を授けられるという幸運に恵まれ、同時に腰帶を食い切られそうになっていた息子の不幸も同時に博野の尉に選授された(廣記一三七・張文成)と僉載に書いた。國史纂異(劉餗撰)には、率更令張文成の家の庭樹に朝まだき梟の鳴くのをその妻が聞きつけ、不吉だとばかりやたらに唾を吐きつける。すると文成は、「すぐ掃除しなさい。きつと官を改められるから。」と言いつけていると同時に、祝賀の客が門に集まってきた(廣記一三七・張文成)という。こんなふうに盛唐末期の劉餗の時代になると、張鷟自身を完全に説話中の人物に化してしまっている。

張鷟は陰陽家の占書を眞劍に信じた。永徽年間(六五〇—五)彼が馬槽廠を作り、家の眞北に一丈ほどの穴を掘ったが、當時の陰陽書に「子の方向に穴を掘ると、落ちて死ぬ者がある」とあるとおろ、奴僕永進という者が井戸さらいをしている最中、土が崩れて壓死した。また陰陽家の方で「喬木が枯れると子供たちが孤兒になる」というとおり、鷟の家でも高さ四五丈の桑が一本何の理由なしに枯れると、ついで祖が死んだのである(廣記一四二・張鷟)という。

また彼は道士の九宮の法という豫言を信じていた。彼自身開元二年(七一四)梁州の道士梁虛舟に九宮の法で推算させると「五鬼年を加へ、天罡命に臨む。一生の大厄なり」と現われる。周易で筮を立てると「觀渙に之く」という卦にあらう。また安國觀の道士李若虛に推算させると「ことしは天牢中に在るから大辟の罪を負うであらう。やがて免ぜられるが、さもなければ病死して救いようがなくなる」と現われる。果して李全交によって危く死罪となるところを、李日知・張庭珪・崔玄昇・程行謀らの援助によって死を免れ、嶺南に配流された

(廣記二二六・開元中二道士)と記録している。

六朝・唐の多くの士人がそうであったように、彼も夢の前兆を信じた。彼自身夢に紫色五彩の大鳥を見て、自分の名字を鷟としたとか、進士に擧げられ、懷州に行ったとき、慶雲が身を覆ったという夢を見たら、翌年の對策において、考功員外郎鷟味道に天下第一とほめられたとか、また岐玉の屬僚だった時、緋衣を着て驢馬に乗っている夢を見たら、その年擧に應じて及第し、鴻臚丞(従六品)を授けられ、考を經ないうちに五品を授けられた(廣記二七七・張鷟)と述べている。

このように迷信深い張鷟であるが、巫や厭咒の虚妄を暴露している。例えば、彼自身のことばに「下里の庸人は、多く厭禱を信じ、小兒婦女は甚だ符書を重んず。愚を縊め姦を崇び、虚を構へて實と成す。土に培し血を用ひしは、誠に伊戾の故の爲なり。地を掘りて桐を埋めしは、乃ち江充の擅まに造るなり。」と記して、來俊臣が庶人賢二子の咒詛を誣告したこと非難している(廣記二八三・來俊)。また張鷟が德州平昌の令だったとき早魃にあり、師婆・師僧に祈禱させたが効果はなかった。ところが土龍を推し倒したらその夜雨が降ったといい、また彼が洪州に數日滞在したとき、何婆という者が琵琶の占をするというので評判だったから、同行の郭司法が占ってもらったら、今年は一品を得、明年は二品、と年を追って昇進し、四品にまで至るのであらうと答えた。郭は何婆が官階の順序をまるで逆に考えていると思つて、ひどく罵つた(廣記二八三・何婆)と記録している。これらの説話は、彼がいかがわしい町の巫祝や咒詛を信じない人間であること語るものである。

張鷟は幻術使いを嫌悪した。例えばこんな説話を傳えている。正諫大夫明崇儼という人は、蜀の縣令の妻の病氣を生龍の肝をとつてきて

治癒させたり、帝が眞夏に雪だの枇杷だの龍眼を欲しがると、すぐ陰山や嶺南に行つて求めてくるし、瓜が欲しいと言えば、時期外れでも持つてくるという幻術使いである。ところがその男は、ただ一人堂中に就寝中、何者かに心臓を刺されて死んでいた。儼があまりに鬼を酷使するので、鬼にうらまれて刺されたのではないかと噂されていたが、張驚は「異端を攻むるは斯れ害のみ、とは信なるかな」(廣記二八五・劉靖妻)と記して、非業に斃れた幻術師の末路を冷靜にうけとめてい

る。また大足(七〇一)年間、妖妄人李慈徳は則天武后に信賴されていたが妖術のために騒動を起して、禁衛軍楊玄基に殺されてしまう。驚はいう「惜しいかな慈徳、厭を以て容を爲し、厭を以て喪ぶ」(廣記二八五・李慈徳)と。こういう妖妄の人物に對して、張驚は疑惑の目を向け、妖妄によつて權勢を得た人物に憎惡を禁じえないのである。ほかに例えれば、武后に仕えた婆羅門僧惠範が、矯わつて妖祥を説き、妄りに禍福をつらねて權勢をふるい、ついに玄宗に斬られたことを記し、「京師のひと快と稱せり」(廣記二八八・惠範)と述べているし、また靴屋出身の道士史崇玄が、太平公主の寵を受けて鴻臚卿を授けられたが、最後は玄宗に斬られてしまうことを記し、「京師中の士女あい賀す」(廣記二八八・史崇玄)と傳える。また武后の證聖元年(六九五)僧懷義は九百尺の大佛を建立して大法要を催した上、かねて埋めておいた金剛像を穴から引き上げて、地から湧き出したと偽つたり、牛血で書いた二百尺の大佛頭像を自分の膝の血で描いたと偽つて開眼法要をしたが、翌日大火によつて全焼してしまつたことを記し、そのあとに「浮休子曰く、梁の武帝は同泰寺に捨身し、百官庫物を傾けて以て之を贖ふ。その夜緣かの電霹靂あり、風雨隕晦なり。寺の浮圖佛殿、

一時に盪盡すと。非理の事は、あに如來の本意ならんや。」(廣記二八八・薛懷義)と結んでいる。通鑑卷二〇九證聖元年の項にはほぼ同じ記事が載せられているが、そのあとに、その放火犯人は御醫沈南珍の武后の寵の厚いことを嫉んだ懷義自身の所行であり、しかもその凶行が發覺することなしに、再び懷義に再建が命ぜられたと記している。張驚には眞犯人を知るほどの明はなかつたものの、嫉妬に狂つた僧の詐術は許せなかつたのである。

張驚はまた相墓の術を信じていたらしい。例えば、長安各地の地形・土質を熟悉する舒綽という相墓家が、吏部侍郎楊恭仁の質問に答えたうえ、福地(墓地として適切な場所)を豫言したことにひどく感激し「當時朝野の士、綽を以て聖となす。……綽の妙能、今古無比なり」(廣記三八九・舒綽)と記している。

天變地異はすべて政治惡に對する天譴であるという觀念は古代からの中國官僚に培われてきたものであるが、張驚もまた開元四年(七一六)に河南・河北を襲つた大蝗害に直面し、その感に陥らざるをえなくなる。「浮休子曰く、昔文武聖皇帝の時、京城を繞りて蝗大いに起る。帝取りて之を觀しめ、對仗一つの大なる者を選び、之を祝して曰く、朕の政刑乖僻し、仁信いまだ孚ならず。まさにわが心を食ふべし。苗稼を害ふ無れと。遂に之を吞む。須臾にして鳥あり、鸚のごとく。百萬群を爲し、蝗を拾ふこと一日にして盡く。これすなはち精感の致す所なり。天もし偶然ならば、すなはち生ずるなきにしかん。天もし厲をなさば、之を埋むるとも滋甚ならん。まさに徳を明らかにし罰を愼し、以て天譴に答ふべし。なんぞ福修まるを見て以て災を禳はざる。而るに殺を逞しくして以て禍を消さんと欲す。此れ宰相姚元崇の變理の道を失すればなり。」(廣記四七四・蝗)という彼の感想に

は、徳を明らかに罰を慎しむことに缺けた當時の政治中樞、特に宰相兵部尚書姚崇（六五一—七二一）の責任を追求する意圖が明瞭である。開元四年の蝗害について通鑑卷二二一に、姚崇は捕殺殲滅説をとって、天災説をとる倪若水を論破したことが記されている。司馬光の姚崇に對する印象はよいものであり、張鷟も倪若水の收賄について記録している（通鑑考異開元四年所引）くらいだから、必らずしも倪若水に加擔していたわけではなく、やはり名望高いこの宰相の缺陷を握っていたからであると考えられる。すなわち同年十一月崇の二子彝异と崇の親近者趙誨の收賄が暴露し死刑になるところを、崇が運動して流罪となるという事件が待ち構えており、この張鷟の記述は、あるいはこういう背景を反映しているとも思われる。

このように張鷟は、彼の耳目に接した神祕的宗教的事件を、彼の信仰の許す範圍においては認尊敬し、許されぬ點についてはその實情を批判している。そしてそういう宗教的事件に對しても、倫理的政治的規範を求めようとする意圖が働いている。彼の信仰は、定命錄における趙自勤のように單一なものではなく、儒・佛・道三教の混雜したものであって、いわば當時の知識人の一般の信仰の範圍を著しくはみ出してはいないものであつたらう。

五 小説史上の位置、および作者の意圖

朝野僉載は、その題名の示すとおり、唐王朝の官僚、あるいは民間の事件・説話を中心に、聞見したことをことごとく收載しようとしたものである。従つてその内容は混雜し、短篇傳記のようなものから、瑣細な制度、文物・風俗などの記録のようなものまでが多量に含まれていて、盛唐期の小説集の中では興味深いものであるが、特に前述の

ように、著者張鷟自身が自己の主張を文章の上に明瞭に發表している所に注意すると、その傾向は、中唐以降のいわゆる傳奇小説の作者が、物語を語つたあとで、その物語の事がらや、人物の行爲について論評を加え、自分の主張を述べるあの形式、いかにも史傳の論贊のような形態をとりたがる傾向を僉載の説話の一部のものも持ち始めていると言ふことができよう。特に僉載は人間の行爲に對する批評を意圖する説話が多く、六朝以來の小説が單に説話の記録のみに終つて、自己主張することのなかつた没個性の傳統をいみじくもそこで破つていゝ。つまり張鷟は、當時の士人の間に話題となつていた人物の言行について、自己の判断と解釋を持ちこみ、それを讀者に傳えようとした最初の人であつたと言えよう。説話小説がそのような過程で作られていた時代であつたから、言わば張鷟は説話の一つ一つの中に「自分」を持ちこみ、自分の立場を明白にし、著述の意圖（主題）を示そうとした最初の人であつたのである。

朝野僉載の記事は一時に書かれたものではなく、おそらくかなり長期間にわたつて、次第に書き蓄えられたものであろう。たとへば廣記一六三所收「高穎」と題する僉載の文章に、西京長安の朝堂の北に、隋代から大きな槐（カキ）の木があり、現在先天（七一二）に至るまで百三十年間もずっと健在であり、現在唐という家がそこにある、と記してゐて、この記事が七一二年のものであることを示している。かと思えば、それ以降、開元年間（七一三—）の記事もあり、最も下限の記事として、廣記一四〇所收の「水災」の記事が開元八年（舊唐書卷八玄宗本紀によれば八年六月のことである）であるあたりまで降ることができる。多くの人物批評ふうの説話のうち、特に則天武后、韋后の周邊にいた人物に關する多くのものは、おそらく一應彼等の處置が濟ん

だ直後に書かれたものであろう。特にその中でもユニークな構成をもつ既述の廣記一六九所收「張鷟」の文章は、十人の中の一着最後に没した人物が李嶠で、開元元年（七一三）であるから、それから間もないころのものであろうと思われる。

そしてそのころ、張鷟はこんなふう在世説新語の作者も考えなかつたような、客と作者の問答形式による人物批評を試みていた。それは漢賦（漢）の問答形式に非常に類似し、しかも流暢な散文によって試みられていた。これはたしかに説話の書きかたの一つの變化である。客は世間一般を代表する作者であり、作者はそれと對立する眞の作者である。ここに眞劍で妥協することのない作者自身がその兩者の對立から浮き彫りにされようとする。

張鷟は多くの宗教的説話を記録し、彼自身の信仰の複雑を示している。それは彼が宗教人でないことを意味しているが、盲目的に多くの宗教にひきずられているのではない。彼は宗教に對して謙虛であり、たえず眞實なものを求めようとしている。例えば、太平廣記九七所收「神鼎」という説話は、有髮の貧僧神鼎という者のことを語つたものであるが、その神鼎が利眞という僧と、萬物は定まらぬか不定であるかという問答をして、ついに利眞をやりこめる話があり、それを見ていた張鷟が「法師を觀るに即ちこれ菩薩行の人なり」と感嘆すると、神鼎が、「菩薩は、利害得失に悲喜せず、虐待にも怒らないものだけれども、私はまだそうはいかない。従つて菩薩を去ること遠いものです。」と答える、という説話である。これは前の問答で神鼎の學識を語り、後の作者との對話でその人格の謙虛さを語るうとしていたのであつて、説話の冒頭の文章に神鼎の身なりの異様さ、食事の異常さが描かれているけれども、けつしてそれは作者の主眼であつたので

はない。ここに一介の乞食僧の偉大さに驚嘆している覺めた作者がいる。同じ作者が武后の寵愛を受けて詐術を謀る僧懷義を糾弾しているところをみればその記事は一層作者の宗教に對する考えを明らかにするものとなるであらう。

このように事件を通して人間を見ようとする態度、地位外見よりも眞の人間性を尊重しようとする態度は、中唐のいわゆる傳奇小説の作者の精神に共通するものである。しかし、説話と現代的意味における小説との間にある懸隔、すなわち虚構性の點になると、それはまだ未熟な段階にあると言わなければならぬ。司馬光は張鷟の筆が誇大に走りがちなることを見抜いてはいるが、誇張した表現と虚構とは全く別のものである。張鷟はその意味で小説の名を避仙窟に譲り、説話集の名を僉載に與えなければならぬ。また僉載は元來その目的で長い間書きためられてきたものである。

張鷟は説話著述の行爲を通じて、たえず人間の生きかた、事件の眞實を求め續けたと言えよう。 (完)

注(1) 舊唐書卷一四九張鷟傳付張鷟傳

(2) 新唐書卷一六九張鷟傳付張鷟傳

(3) ① 唐紀一八高宗紀儀鳳三年（六七八）九月の項において、李敬玄が十八萬の兵を率い、吐蕃と青海で戦つたとき、劉審禮が前軍となり包圍されたのを、戦死したと聞き誤つて敬玄があつて敗走した事件を記したあと、考異に僉載をひき、「聞劉尙書沒蕃、著讎不得、狼狽而走、遣却麥飯首尾千里、地上尺餘。言之太過。今不取」と記す。これは廣記二五五所收「李敬玄」と同内容である。

② 唐紀二二則天紀神功元年（六九七）の項に、王孝傑が十萬の兵を率いて契丹と戦い、敗れて崖から墜死したことを記し、その考異に僉載を引いて「孝傑將四十萬衆、被賊誘、退遁就懸崖、漸漸挨排、一一落

間。抗深萬丈。尸與塵平。四馬無歸。單兵莫返。張鷟語事、多過其實。今不盡取」と述べる。これは廣記に未檢である。

(4) ① 唐紀二一則天紀萬歲通天元年(六九六)の末尾に周興、來俊臣、徐有功の邪正を論じ、鹿城主簿宗城藩の論著をひいた中に、考異に僉載をひき(省略)、その後「蓋時人見俊臣所誅、有功所雪、往往得其所欲疑、以爲先進狀耳。若有功一先奉進止、何至三陷死刑乎。今不取。」と記す。所引の僉載の文は廣記二六七「羅織人」と同じものである。

② 唐紀二二則天紀聖曆二年(六九九)八月の項に、内史王及善が辭職を願ひ出たが許されなかつたことを記したあと、考異に僉載をひき、「王及善才行庸猥、風神鈍濁。爲内史時、人號爲鳩集鳳池。俄還文昌右相。無它政。但不許令史奴驢入臺、終日迫逐、無時置捨。時人號驢驢宰相。」此蓋張文成惡及善、毀之耳。今從舊傳。」と述べる。この僉載は廣記二五八「王及善」と同内容である。

(5) ① 唐紀一九則天紀嗣聖元年(六八四)の項に、李敬業の亂のさい、宰相薛炎が武后に政權をとれば平定するまでもないでしようと思慮をとり結ぶ奏上をしたのを、監察御史崔魯が批判し、結局炎は投獄されたという事件を記し、その考異に僉載をひき、駱賓王が敬業の命を受けて謠を作り、炎を反亂に引きこんだという僉載の記事をあげたあと、「此皆當時構陷炎者所言耳。非其實也」と言っている。この僉載の記事は廣記二八八所收「駱賓王」と同じ文章である。

② 唐紀二三則天紀長安元年(七〇一)正月の項に、成州に佛迹が現われ、年號を大足と改めたという記事の考異に僉載をひき、その佛跡は司刑寺の囚人が秋分の後獄外の垣根のあたりに偽造したものであることを述べたあと、「按改元在春、不在秋。又無赦。今不取」と述べる。この僉載の記事は廣記二三八所收「朱前疑」の文と同一である。

(6) ① 唐紀二二則天紀聖曆元年(六九八)十月の項に、突厥の默賧に協力した閻知微を極刑に處し、その三族を夷らげたことを記したあとの考

異に、僉載をひき、そのあとに「今從實錄」と記している。この僉載の記事は廣記一六三所收「閻知微」の一部分と同じである。

(7) ② 唐紀二七玄宗紀開元四年(七一六)十二月の項に、姚崇の二子と趙誨が收賄のため處罰されたことを記し、その考異に僉載をひき、姚崇は倪若水の收賄をうまく助けてやつたに趙誨のちよつとした收賄を嚴罰に處したと記す。そして「今從舊傳」と述べて、姚崇を擁護する方にまわっている。僉載のこの文は廣記本には未檢である。

① 唐紀二二則天紀神功元年(六九七)六月の項に、來俊臣が宰相以下士人の妻妾を奪つた記事の考異に僉載をひく。僉載の方が俊臣の酷暴ぶりをよく表現している。しかしこの僉載の文章は廣記・唐代叢書・類說・說庫本に載せない。

② 同じく聖曆元年(六九八)八月の項に、突厥の默賧可汗が定州に入寇し、刺史孫彥高及び吏民數千を殺したことを記したあと、考異に僉載をひき、孫彥高の頑愚さを物語っている。この文章は廣記二五九所收「孫彥高」の文章と同じエピソードであるが、一層詳細であつて、廣記の編者が簡略化したのか、それとも、司馬光が廣記本より詳細な別のテキストに據つたのか不明である。

③ 唐紀二六睿宗紀景雲二年(七一)十月の項に、崔湜が太平公主のお氣に入りて宰相になつたことを記し、その考異に僉載を引いている。所引の僉載は廣記二四〇「崔湜」の末尾の文章である。

(8) ④ 唐紀二六玄宗紀開元元年(七一三)十一月の項に、中書侍郎王琬が玄宗の信任を得て御史大夫兼北邊諸軍事になつたことを記し、その考異に僉載をひき、琬は諂諛で立身したが、その母が上京して琬を戒めたという逸話をのせる。廣記では未檢。

① 唐紀二三則天紀長安元年(七〇一)三月の項に、蘇味道が降雪を瑞雪であると稱して入賀したのに對して、殿中侍御史玉求禮が反對したことを記し、その考異に、「今年は僉載に従ひ、官は舊記に従ひ、事は

則ち諸書を參取す」といい、僉載の久視二年（すなわち長安元年）説が採用されている。僉載のこの文は廣記に未檢である。

② 唐紀二四中宗紀神龍二年（七〇六）三月の項に王同皎・張仲之らが武三思を殺そうと謀り、逆に殺害されたことを記し、その考異に僉載をひき、その後「今從僉載」と記す。この文章は廣記二六三「宋之遜」と同文である。

③ 唐紀二六玄宗紀開元元年（七一一）七月の項に、太平公主が亂を起そうとして敗れたことを記して、その考異に「玄宗實錄作乙丑。按僉載七月三日誅常元楷、今從。」とあり、陰謀の敗れた日を明記した僉載が用いられている。この文章は廣記に未檢。

(9) 唐紀二四中宗紀神龍二年（七〇六）四月の項に、左御史大夫蘇珣らが杖刑を受け嶺南に流され、秋分を過ぎること一日の平曉に廣州都督周仁軌に斬られたことを記し、その考異に「朝野僉載曰、周仁軌過秋分一日平曉斬之。有赦捨之而不及。」と記したあと、統紀・舊傳の誤りを正し、僉載に従っている。この文章は廣記に未檢。

(10) ① 唐紀二二則天紀神功元年（六九七）六月の項に、武承嗣が喬知之の妾の碧玉を奪ったことを記し、その考異に僉載が碧玉の事で知之が承嗣に羅織され、市の南で斬られたと記しているのを引き「此時知之在邊。蓋承嗣先術之、至此乃殺之耳。」と説明している。所引の僉載の文章は廣記二六七「武承嗣」による。

② 唐紀二三則天紀長安三年（七〇三）十一月の項に、宮尹崔神慶が太子の臨時の參内には墨敕が玉契を用いるべきことを上疏したことを記し、その考異に僉載を引き、武后朝には龜符が用いられていたことを參考として擧げている。この僉載の文章は類說本に「銀龜符」と題して收められているが、やや文章が異っている。

③ 唐紀二四中宗紀神龍二年（七〇六）六月の項に、周仁軌が嶺南で功績をあげ、韋后に拜謁を賜わるに至ったが、韋氏の滅亡と共に一黨と

見なされ、殺されたことを記し、その考異に「朝野僉載曰、韋氏遭則天廢廬陵之後、后父韋玄貞與妻女等、並流嶺南、被首領魯氏大族逼奪其女、不伏。遂殺其夫妻七娘等、並奪去。及孝和即位、皇后當途廣州。都督周仁軌將兵誅魯氏。走入南海、軌追之、殺掠並盡。韋后隔簾拜、以父事之、用爲并州長史。後可韋作逆、軌以黨與誅。今從實錄、參取諸書」と記す。僉載も參考文獻として用いられている。しかしこの文は廣記にない。

(11) 唐紀二二則天紀長壽元年（六九二）一月の項に、寧陵丞郭霸が武后にこびて監察御史に拜せられたことを記し、その考異に、「僉載云、應革命舉、蓋正謂此時也。」と記す。この文は廣記二六八「酷吏」の文の一部分である。

(12) 舊唐書卷九三婁師德傳

(13) 舊唐書卷八九狄仁傑傳

(14) 舊唐書卷八七李昭德傳

(15) 舊唐書卷九二魏元忠傳

(16) 舊唐書卷九四李嶠傳の末尾に付せられた論文。

(17) 舊唐書卷八五徐有功傳

(18) 漢書卷四五の贊文に「伊戾坎盟、宋痤死」とあり、李奇の注に「伊戾爲太子傳、無寵。欲敗太子、言與楚客盟謀。宋詐歃血加盟、書以證之。公以故殺痤」とある。

(19) 漢書卷四五江充傳に「充既知上意、因言宮中有蠱氣。先治後宮希幸夫人、以次及皇后。遂蠱於太子宮、得桐木人。」とある。

(20) たとえば「登徒子好色賦」（宋玉作）など。